気弱巨乳少女の
金責め喧嘩道！

目潰しと金潰しを教えられた素人少女が
不良たちとストリートミックスファイト

玉子王子　著

１章　危機に陥った気弱少女の下に、金責め大好き空手美少女が現れ、不良たちのキ〇タマを蹴りまくる

「いいよ、だって困ってるんだろうから」

二人の制服の少女が道を歩いていた。

薄い金髪のふわっとしたショートカットの少女は気弱そうな、困ったような目付きで頭を振る。

「クロコがいいならならいいんだけど……」

寄付だ。

白浜黒子は最近おやつを切り詰めていた。

そして今日、楽しみにしていたアイドル歌手のＣＤを買いに学校帰りに商店街に寄ろうとしたのだ。

が、途中で寄付を求める子供たちに出会うと、その金を募金してしまった。

いや、別に「してしまった」というのも変な話だが、一緒にいて、**ニコニコしていただけ**の友人にとってはやりすぎと思えた。

――余裕があっても、寄付なんてせせら笑う奴らの方がきっと多いのに、切り詰めて貯めたお金を寄付することはないわよ。

そう思うが、それをやってしまうクロコが好きでもあった。

幼馴染だ。

気の弱そうなクロコだが、芯は強いことを榊は知っていた。

小学校の頃、いじめられそうになった榊を助けてくれたのだ。

いじめの中心だった女子をいきなり突き飛ばしてマウントを取り、パウンドの嵐で顔面をベコベコにした。

ナノマシン入りの薬一粒で傷一つなくなるとはいえ、女子が女子にそれは学校中を引かせるに十分なインパクトがあった。

いじめを止めた気弱な女子など、次の格好の標的だが、誰もクロコを狙おうとはしなかった。

顔面ベコベコはマジ勘弁ということだろう。

二個上の当時中学だった姉の元にまで**顔面粉砕幼女**の噂は流れていったという話だ。

――あ、そういえば最近うさぎ小学校に**キ〇タマ粉砕幼女**が現れたって噂あったわねえ。どこにでもああいうのはいるのね。

榊たちが通ううさぎ女子校にもいるのだ、**雄玉粉砕少女**が。

北山高菜という、空手部主将の三年生。榊の姉の柔道部主将と同学年という事になる。

まあ、男の不良などに迷惑かけられた時などは頼もしいが、それ以外のときはそれほど近付きたいタイプでもない。

普通の少女である榊にとっては、**男性器集中攻撃**というのは想像するだにきつい。

いや、かりに大事なモノが二つとも潰れようとナノテクで十秒で治るのではあるが、やはり怖いものは怖い。

「それじゃ」

榊が手を振り、別の道に歩いていく。

控えめに手を振るクロコ。

しばらく一人で歩く。

と、胸が高鳴る。いい高鳴りではない。

道を歩いていたら、人相の悪い少年グループに出くわした時のような嫌な高鳴りだ。

というか、別に「ような」ではなく、実際に出くわしたのだが。

――マヤ……

一瞬、先ほど別れたばかりの親友、榊麻耶沙を呼ぼうかと思った。

思って、一瞬で気分が沈む。

――変な人たちが前から来たから……って、そんな理由で呼ぼうと思うなんて。そんなに頼っちゃダメだ。ただでさえ私なんか、負担なんだし。

勉強やスポーツも出来る榊と、中の下がいいところのクロコ。

友人が多い榊と、榊しか友人といえる人間がいないクロコ。

榊の親友として、自分が吊りあうのか。

親友だなどと、おこがましいのではないか。

最近、クロコはかなり悩んでいた。

が、そんな内面など、不良たちにはまったく関係ない。

ニヤニヤ笑いつつ、近付いてくる。

そして、ジロジロとクロコのかなり大き目の乳房を舐めるように見る。

「おー、オッパイでっかいじゃん」

「そっスね」

「モミモミさせて？」

「いいっすね」

「な、何ですか……」

突如行く手を阻み、異常な言動をとる男たち。

五人。

華奢だが胸は大きいという美味しい感じの少女、気弱そうな顔つきがドキリとさせてくれる美少女でもある。

しかも、言動からして本当に気弱そうだ。

「ちょっとセックスいい？」

「直球！」

笑いあう男たち。

ぞ、と血の気が引くクロコ。

その名の通り、目立たず生きて生きたいと思っていた。

そんな目立つほど価値がある人間とも思わない。

おやつを切り詰めたときも、自分など別に美味しいものを食べるほどの価値はないと思えば、苦でもなかった。

しかしそれでも、「この手合い」と何かするなど考えられない。

そんなにすばらしい大恋愛が出来る人間とは思っていない。

何とか公務員にでも転がり込み、職場にいる同年輩で独身という、ほぼ選ぶ幅がない中から相手を選び、一様は自分の意思で相手を選んで結婚するなり付き合うなりしたい。

そのぐらいは許されると思っていた。

だが、急にその未来が揺らぐのを感じる。

――ああ、そんな……このままホテルとかに連れて行かれたり……

「向こうにいい公衆便所あるんすよ！」

「いいねえ。それじゃオッパイちゃん」

「ひ、ひい……誰か……」

便所。

無理矢理はじめてを奪われる上に、その場所は便所だというのか。

周りを見る。

誰もいない。

意識が遠くなる。

死ぬ。

こんな体験は耐えられない。

死ぬしかない、と思う。

「おい、きいてんのか！」

「いいって、一緒に歩いてくれれば」

背中を押され、機械のようにただ歩くクロコ。

そのまま便所まで運ばれ、その後は……

絶望しかないが、それでも何も出来ないでただ歩く。

しばらく歩いたところで。

「はぐああっ！」

突如、不良が絶叫する。

先ほどから続く意味不明の言動とは違う。

意味不明ながら、先ほどまでのは意味があったのだ。

が、今度はまったくない。

「おんぐうううううう」

　転がる不良。股間を押さえ、白目を剥く。

　その前には、横の道から急に現れた長身黒髪巨乳の少女が立っていた。

「て、てめえ何を……」

　同じ男として、仲間が何をされたのかはすぐにわかる。

　目を血走らせる不良。

　が、横の一人は真っ青になる。

「あああ！　こ、こいつは……」

「え？」

　目を血走らせていた男が一瞬真顔になる。

　が、それに何の反応も見せない仲間。

「い、いやだあああああああああ！」

　不良の一人が絶叫し、踵を返す。

　と、その背中に飛び蹴り。

　吹っ飛ぶ不良。

　吹っ飛んだ不良に走りより、足を掴んで引き上げるのは背の高い女。胸も巨大で、長い黒髪の美少女であるが、その行動はとても「美少女」という印象からは遠い。

「お前仲間を置いて逃げるとはなんだ！　キ〇タマ潰すしかないな！」

「ちょ、やめ……あぎゃあああああああ！」

　ゴスゴスゴスゴス、と満面の笑みを浮かべて不良の股間を踏み潰しにかかる女。

　ぐちゃ、ぐちゃ、と餅つきのように陰嚢が圧迫され、解放され、また圧迫されが繰り返される。

　華奢といえる少女の足だが、鍛えられ、さらに靴まで履いているのだから男の股間に対しては十分以上の凶器だ。

　というか、素足でもバットを数本まとめてへし折ったりいろいろ出来る足なので、別に靴がどうという問題ではない。

　根っからの凶器だ。

　それが両足を掴んで電気あんまの体勢になって、ゴチャゴチャと男の命に減り込ませてくる。

　電気あんまという、一種遊びの形でありながら、それが与えてくる損傷はまさしく致命的である。

　その様を見て、震える不良たち。

　少女を一人が指差す。

「あ、あいつ、あいつ高菜！」

「う、うそだ……**狂人高菜**か！？　あんなかわいいのかよ！？」

「おぎゃあああああああああああああ！」

電気あんまを食らっている不良が絶叫する。

高菜がトロンとした目で男を見下ろす。

屈辱と苦痛、恐怖に満ちた男の顔を見て、高菜は性的興奮に満ちたため息をつく。

「うふふ、その叫びの感じ、片金が潰れたな。もういっちょ！」

「はぎあああああああ！」

駄目押しの股間踏み潰し。高菜の足の下で、踏み潰された右玉の残骸が更なる激痛を生む。生き残った左玉は、何とか潰されず、ただ、強烈な痛みで不良の内臓を締め付けた。

泡を吹き、バタバタと手足をばたつかせる不良。

「ああああああ！　いいな！　キ〇タマが潰れた男を見るのは凄くいい！　いつも！　威張っている男が！　男性様がだ！　大事なところを女に潰されてのたうつ姿！　実にいい！」

片足を離し、片足を掴んだまま、ズルズルと引きずってくる高菜。

棒立ちの不良たちの体の一部をチラチラと見つつ、頬を歪めて笑う。

「十個も相手となると、私も全力を出さざるを得ない」

「キ〇タマの数で数えるな！」

「まあ、もう九個なわけだが！」

　目をぎらつかせる空手美少女（笑）に、不良たちの股間は縮み上がる。

　と、その縮んだモノに高菜の爪先が減り込む。

「ほぎゃあああああああああああ！」

　片金を潰した不良の足を離すや、素早い踏み込みで金的爪先蹴り一閃。

　その金的爪先蹴りによる奇襲は、高菜がかなり得意とする必勝形の一つだ。

　体格がいいだけの素人の男をそれで瞬時に無力化したことは数知れない。

　別に、金的など狙わないでも素人ぐらい圧倒する空手の腕があるのに、彼女は急所を潰せる機会は逃さない。完全に**そういう性的な趣味を持っている**としか言いようがない。

　そのドＳ少女が涎すら垂らしながら叫ぶ。

「おっ！　今の感触は二個玉潰れたな！　大丈夫！　ナノ薬があるからな、新薬だから十秒でキ〇タマ再生だ。でも、逃げるかもしれないからとりあえず投与はしない」

　その場で膝を突いて頭からコンクリートに突っ伏す不良。ただ股間を押さえて悶絶する以外に何も出来ない状態だった。

　それを横目で見るクロコ。

　――た、タマタマ潰れたらあんなに……

　唾を飲む。

　なぜか、頬が赤らむ。

　昔のことを思い出すクロコ。

　小学校の頃、幼馴染を苛めたクラスメイトを殴りまくったことを。

　はっきり言って**殺す気だった**が、マウントを取って相当殴ってもまだバタバタと抵抗していた。

　それが、どうだ。

　今高菜が僅かに股間を蹴った三人の男――はじめの一人を蹴るところをクロコは見ていないが、倒れた感じからしてそうだろうと想像していた。もちろんそれは当たりである。

　はじめの一人は運良く玉が潰れてはいないが、いきなりの激痛で完全に気絶していた。

　ともかく、男たちは小学生女児より遙かに頑強で体力があるはずだ。

　なのに身動き一つできない。

　高菜の話が正しければ、一人はまだ片方しか潰れていないのにだ。

　――キ〇タマは二つずつあるのよね？　一個残ってても ああなんだ……本当に弱点なんだ……

　華奢で力もない自分。

　しかし急所を狙えば、男でもなんとかなるのではないか。

　いや、むしろ女子の強い者より、男の方が倒せるのではないか、男性器という急所をもっているというただそれだけの理由で。

　不良が、もうそんなクロコに何の関心も払わず、ただ膝を締めて金的を警戒しながら高菜に話しかける。

「た、高菜！」

「ぬ？」

「……さん！　なんで俺たちを！」

「私の拳があれだよ、真っ赤にほら、燃えたり燃えなかったりしてだな！　キ〇タマを潰せと叫んだり叫ばなかったりする！　ということだ！　だから潰したってことだ！　理由なんかそれだけだ！」

顔を見合わせる不良二人。

どう考えても嘘だ、百パーセント、ガ〇ダムネタだ。それも文句をつけられないように相当腰が引けた形の。

しかし高菜が言うと**本気でいっているのかもしれない**とちょっと思えてしまう。

そういう狂気に満ちた存在ではあった。

その困惑を見て、高菜は笑う。

「ふふ、まあそういう理由でもいいんだがな。お前らキ〇タマ潰される理由はわかってるんじゃないか？」

「な、ナンパをするのは、いけないことですか？　はぐっ！」

股間ではない。

高菜は中段と下段の真ん中の軌道の蹴りで不良の腹を蹴っていた。

三日月蹴り、と呼ばれる肝臓への攻めだ。

「はぐぐぐぐ」

激痛で動けない。しかし倒れるほどでもない。

そんな不良に歩み寄り、ポンと叩く。

高菜であるから、もちろん股間をだ。

グニュグニュと、縮み上がった股間を探る。腹にへばりついても、睾丸はしっかり形として存在しているのだ。

それをズボン越しに探り出すのに、高菜は嫌になるほど慣れていた。

「あ、お宝発見」

指先で、縮んだ肉袋の中のちょっと硬いモノ二つを確認し、指を下に押し込んで上手く手のなかに握りこんでいく。

「あ……、ちょ……おぐうううううううううううっ！」

「キ〇タマ握り潰しは一瞬で蹴りをつけなければ反撃される」

「ちょ、ま、ああああああああああああああああああああああああ！」

高菜は、ブチュと、ブドウの相当硬いものが二つ潰れるような感触を手の中で感じる。

ギュ、と男を知って久しい雌穴が物欲しげに引き締まるのを感じた。

――ああ、手のなかでキ〇タマが潰れるこの感触……これ以上いい感触がこの世にあるかな？

泡を吹き、転がる不良。

死んだ方がましの激痛と、女に去勢された屈辱、恐怖、さまざまなものが混ざり合い、彼の中に地獄を形成していた。

残りは一人だ。

それに、手を広げて突きつける高菜。

「後五つ！」

「やめてくれ……キ〇タマの数で数えるのはやめてくれ……」

「お前ら、この子を便所に連れ込んでレイプしようとしたな？　それはキ〇タマを潰されて当然の罪なのだ。キ〇タマが再生できない時代ならまだしも、今はナノテクで十秒で玉再生可能なんだから。

むしろ十回ぐらい潰させろよ」

膝を締め、両手を股間の前にやる不良。

「へ、へへへ……これで玉潰せまい……ぺっ」

唾を吐いたわけではない。

足刀蹴りという、足の小指から踵の間の側面の部分を使った蹴りが不良の喉に減り込んでいたのだ。

もちろん高菜の足だ。

長身で、足も長い高菜。

スラッととした肉付きのいい足はシミもなければ、ほくろもほとんどない。

無駄毛もろくにないという現実離れした美脚である。

さらに爆乳と言っていい位の大きさの均整の取れた巨乳に艶やかな漆黒の髪。

整いすぎなのがマイナスなほどの顔形。

これで内面さえまともなら。

いや、せめて**男性器破壊で性的興奮を覚える性癖**さえなければと残念がる人間は百人や二百人ではないだろう。

フワリとスカートが靡き、細かいことを気にしない高菜の性格をあらわすような飾り気のない白いパンツが見るものもない中で表に出て、すぐに隠れる。

喉を押し潰され、声もなく蹴られた場所を押さえ、つんのめる不良。

それに背中を向ける高菜。

走るような形で、足の裏を後ろに跳ね上げる。

背足蹴り上げ。

ドグチャ、ともうどう考えても絶対に股間が出してはいけない音を上げて不良を文字通り蹴り上げる。

浮いて、足が下がると、その場にやはり何一つ出来ずにただ膝を突き、倒れこむ不良。

完全に、睾丸を二つとも蹴り潰されていた。

靴越しだが、引くほどの数の睾丸を蹴り潰してきた高菜には両玉破壊を察知し、ニンマリと笑う。

「女に睾丸蹴り潰されてしまったなあ……男としてどうだ？　不良として、レイプしようとするぐらいだ、女を見下してきたんだろ？　それが大事な大事な、男のタマタマを女に……って、言葉責めしようにも気絶しちゃ仕方ないな」

舌打ちするドＳ少女。

が、すぐに切り替える。

はじめの奇襲膝金蹴りで倒した男を見る。

気絶し、顔面から道に突っ伏している。

それを起し、睾丸踏み潰しも高菜は平然とやってのける。

が、今日はもうかなりの金潰しを楽しんだので、そこまでする必要はないか、と少しだけ優しさを見せる高菜。

しかし、気絶していない一人は、片金だろうが逃がす気はない。

まだ獲物はあと一人……いや、高菜風に言えば**後一個**。

「さー、気絶した奴は慈悲をもって見逃すとして……後一個」

「は、はひいいいい！　お、俺も見逃してくれよおおおお！」

はじめに電気あんまで片金粉砕された不良がはって逃げる。

ズリズリと、片金粉砕の痛みや衝撃で下半身がまともに動かないらしく、しかもズボン越しでも擦れて痛いようでろくにスピードが出ない。

それを見て、心から楽しげな高菜。

「ああ！　大変だ、逃げられてしまう！」

そして、面白い台詞だろう、といわんばかりのドヤ顔をクロコに向ける。

突然の高菜からの目線に、飛び上がるクロコ。

しかし、顔を赤らめたまま、そちらに一歩踏み出す。

「あ、えーっと……私も強くなれますか？」

「ん？　ああ、こういうときは……私より強くなれるぜ」

歯を剥き、凄くいい笑顔を見せる高菜。虫歯一つない。

いきなりの笑顔に頬を引きつらせるクロコ。

「いや、「なれるぜ」って」

空手部主将というガチ体育会系ながら、オタクでもある高菜。

オタクにありがちなことに、自分が知っているネタは他人も知っていると半ば本気で思い込んでいた。

「なんだ、からくりサー〇スネタだよ。知らないのか？」

「すいません、サーカスはあまり見ないので」

「いや、漫画なんだけどな」

これもオタクにありがちだが、わからないなら別にわからないでもかまわないと言うわりと閉じた感覚も持っている。

と、数度ジャンプし、逃げていく不良の前に着地する高菜。

「おらっ！　逃げんなキ〇タマ！」

「ひ、ひいい！」

「もう一個潰してから薬でタマタマ再生させてやるよ！　片金で逃げるより得だろ！」

「いや、ナノ薬ぐらい持ってるから別に高菜さんの手を煩わせないでも……」

「じゃあ飲め」

「いやあ……」

男ならもちろん、最優先で睾丸を再生したい。

しかし、この場ではそれは憚られた。

どう考えても、金潰しが大好きな狂人を喜ばせてしまう。

「っていうか、もう最後の一人だから、サービスしてやろう」

「え、それって……」

「キ〇タマがどうなってるか、見てやるよ」

「さ、サービスの意味わかってる？」

「美少女におチンチ〇見られて嬉しいだろ？」

「本物の美少女は「美少女におチンチ〇見られて嬉しいだろ」とは言わないと思う……あ、やめて！」

「心配するな！　私の彼氏はチ〇ポ超小さいぞ！」

わけのわからないことを言いながら、文字通り襲い掛かっていく。

蹴飛ばして仰向けにして、ズボンをひき下ろす。

「やめろおおおおおお！　俺は銀盾隊の西尾くんの友達だぞ！　ひいいいいいいいい！」

パンツまで容赦なく下げられ、片金の痛みで動きが鈍い足をそれでもバタバタと暴れさせる不良。

その足の間で、控えめに言っても超短小の極小租チンがプルプルと震えていた。

奪ったパンツを投げ上げながら、クロコを振り返る高菜。

「おー！　見ろ君！　こいつのチ〇ポ小さいぞ！　片金潰されて縮んでるのを考慮しても超短小だ！なぜわかるかというと、先っぽは縮まないからだ！　先っぽの大きさで普段の一物のサイズを推測することが出来る！　こいつの皮に包まれた先っぽはクッソ小さい！　はははははクッソ小さい短小チ〇ポだ！」

本当に**美少女がやっていい言動ではない**と思えるようなことを言いまくる高菜。

クロコは処女である。

大人の男性器を見たのは、父親とずっと昔に風呂に入ったのが最後だ。

「うわ……そんな……」

顔の辺りを手で押さえ、「見るのが恥ずかしいです」という良い訳だかなんだかをしつつ、ばっちり不良の股間をみにくるクロコ。

高菜は不良の体の横で、足と手を両方押さえる形だ。

無防備に開かれた股間の向こう側の特等席にクロコがいる形だ。

「や、やめて……見ないで」

「レイプしようとしてよくいうな。気に入った、これを飲め」

「あっ！」

油断した所に、ナノ薬を口に放り込まれる。

縮み上がった肉袋のなかに、再び両玉が揃う。

縮んでいるのでよく分からないが。

「さあ、何で治したかというと……」

「あっ！　チ〇ポ……」

「きゃ！　そ、そんな汚いもの握って……」

握る。

超短小包茎チ〇ポを。

「チ〇ポの本番はもちろん勃起時だ！　本当に小さいのか確かめてやるよ！　片金潰れてたら痛みで立たないから再生させたわけだ！　と言っても、潰れた玉から常時発生する痛みは止まっても、玉が潰れた時に発生した痛みは消えないが、そこは根性で立たせてもらう！」

クリクリと、皮を生かして愛撫する。彼氏が超短小チ〇ポの持ち主なので、そういう相手への手コキには相当に慣れている高菜だった。

悶える不良。

「ああっ、や、やだっ！」

「やだって乙女か！　立派なチ〇ポぶら下げて……」

「ん……」

ピク、と顔をゆがめるというか、少し笑う不良。

それに気づき、高菜は口を開く。

「ああ、立派ってのはサイズじゃなくて、ちゃんと機能する大人の男性器って意味だから」

「知ってた」

「ほらほら、勃起しろ。くりくりくり、といっても、クリじゃない。チ〇ポなんだ。見てもわかりにくいがな！」

「この女本当にチ〇ポ立たせる気あるの？」

酷いやり取りだが、高菜の手コキが高レベルであることは確かだった。

しかも、巨乳美少女というのも事実である。

内面を無視すれば、嬉しい状況と言えなくもないかもしれない。

いや、無理矢理フルチンにされ、短小を確かめるために無理矢理立たされる状況はやっぱり嬉しくないか。

――だめだ、だめだ、立ったら絶対笑われる。立っても俺のチ〇ポ小さいんだから……我慢しないと……ああ、でも気持いい……こいつ動かなきゃ最高にいい女だし……こんないい女に手コキしてもらうなんて……ああ、もうだめだ……

必死で耐える不良だが、ついに力尽きる。

満面の笑みの高菜。

「あはははは！　見ろ、やっぱりチ〇ポ小さい！　これは小さいぞ！　だが、性交には問題ないサイズだ！　その中のギリギリの大きさだな！　私の彼氏と同じだ！　これは遠慮なく笑える！　これ以下だとちょっとシャレにならないが、これはセックスに何の問題もない健康チ〇ポだから笑ってＯＫだ！」

「健康でもチ〇ポ笑っちゃダメだろ！？　大人の女ならわきまえろよ！」

絶叫する不良だが、フルチンで極小の一物を勃起させた状態では誰も聴くわけがない。

「性交に問題ないとはいえ、長さがいる体位はちょっときついからこういう相手と付き合うなら気を使ってやれよ！　短小は気にするからな、男は！　チ〇ポが小さいせいで腰振ったら抜けたとなればガックリくるんだこれが」

「そ、そうなんですか……でもこれ……本当に小さい。だって近所のよう……小学校の子より」

「あはははは、今幼稚園って言おうとしたな？　不良、お前も聞いただろ？」

「いや……」

「ひいいいいい、聞こえない聞こえない……」

「今幼稚園って言おうとしたな？　聞いてただろ不良！」

「いや！　そんなこと……」

「聞こえない聞こえない聞こえない」

「はははははははははは！　幼稚園児でもお前より巨根はいるが……気にするなよ」

笑いまくる高菜。

男性器の大きさを男が大いに気にすることを知っての仕打ち、流石のドＳである。

愕然として、最早反応がない不良。

それに対して**駄目押しの金潰し**は流石の高菜もやらず、その場に放置していく。他の不良たちにはナノ薬を飲ませる――潰れていないと思う相手にも念のために飲ませていった。

玉が治ったので、頬でも叩けばすぐに目覚めるだろうが、それはしない。

　車にひかれないように道の脇に転がしておくだけだ。もちろん反応がなくなった一人もである。

「いやあ、すきっと爽やか。帰るとするか」

「あ、あの……北山先輩ですよね？　空手部の」

「ああ、君は。白浜黒子？　面白い名前だな……じゃなくて、いい名前だな。で、何か？」

「その……さっきも言ったんですけど……私、強くなりたくて」

「それなら、空手部に入るといい。……と言っても、部活レベルじゃ大して強くならないがな。私や海子は子供のときからやってるし」

「そうですか……」

　ガックリと肩を落とすクロコ。

　ドＳだが、人を精神的に苦しめたり嫌がらせをするのは大嫌いの高菜。

　短小責めはするが、それでずっと嫌がらせをしたりしない。

　スイッチが入ったときだけ責めて**快感を得る**というだけのことだ。

　そういう高菜なので、ガックリされると少し狼狽する。

「ん……そうだな……手っ取り早く強くか……なくはないが」

「え、本当ですか？！」

「でも、半端に強い方が危ないからな。やっぱり危ないことがあったら走って逃げるんだ。今のクソ連中でも、君が人気のある方向に走っていったら諦めただろう」

　高菜の台詞とは思えない正論だった。

　再度肩を落とすクロコ。

　別に常日頃から危ない生活をおくっているわけでもないのだ。

　逃げるべき、といわれればその通りとしか思えない。

「ん……でもまあ、一様二つだけ」

「あ、ありがとうございます！」

「まあ大した話じゃないんだが……目潰しと金潰しだな」

「き、金……」

　絶句する気弱少女。

　それでも、顔を赤らめたまま熱心に高菜の話に耳を傾ける。

　しばらく不良たちの倒れている場所から離れてから、高菜と別れるクロコ。

体験版終わり

守られて助かった主人公でしたが、

次の危機は自力で何とかしなければなりません

教えられた金的が早速炸裂となります　ＣＦＮＭネタもあります

続きは製品版でお楽しみください